

資料：

## 地域共生演習「もりさま祭り」の記録と今後への提案

人見 英里<sup>1)</sup>、小方 礼次<sup>2)</sup>、安邊 唯可<sup>3)</sup>、荒瀬 恵里<sup>3)</sup>、磯部 莉佳<sup>3)</sup>、  
伊藤 叶芽<sup>3)</sup>、河村 菜々子<sup>4)</sup>、鈴木 日奈子<sup>5)</sup>

### Record of "Mori-sama Festival" in the class "Seminar in Community Collaboration" and suggestions for the future

HITOMI Eri<sup>1)</sup>, OGATA Reiji<sup>2)</sup>, ABE Yuika<sup>3)</sup>, ARASE Eri<sup>3)</sup>, ISOBE Rika<sup>3)</sup>,  
ITOU Kaname<sup>3)</sup>, KAWAMURA Nanako<sup>4)</sup>, SUZUKI Hinako<sup>5)</sup>

#### 要 旨

山口県立大学では、2007年から2021年にかけて、全学共通教育として「地域共生演習」という演習科目を開講し、学生が地域住民と共に地域課題解決に向けて取り組んできた。その中で13年間にわたり地域住民や連携協定高校の高校生とともに地域の祭り「もりさま祭り」に取り組んだ事例を紹介する。さらに、カリキュラム改訂による科目廃止後の祭りの存続について、「地域共生演習」履修学生と共に提案を行った。

#### Abstract

From 2007 to 2021, Yamaguchi Prefectural University offered a seminar course called "Seminar in Community Collaboration" as a part of its general education curriculum. In this seminar, students worked together with local residents to solve regional issues. Among these projects, we will introduce the example of working together for 13 years on the local festival "Mori-sama Festival" with residents and high school students under a cooperation agreement with the high school. In addition, we worked together with the students who took the "Seminar in Community Collaboration" to make a proposal to support the survival of the festival after the abolition of the course due to a curriculum revision.

キーワード：

もりさま祭り、地域共生、祭礼、高大連携

Key Words：

Mori-sama Festival, community symbiosis, festival, high school-university cooperation

- 
- 1) 山口県立大学看護栄養学部栄養学科
  - 2) 今八幡宮
  - 3) 山口県立大学看護栄養学部栄養学科2年
  - 4) 山口県立大学国際文化学部文化創造学科1年
  - 5) 山口県立大学看護栄養学部看護学科1年

- 1) Department of Human Nutrition, Yamaguchi Prefectural University
- 2) Ima-Hachiman-Gu Shrine
- 3) Department of Human Nutrition, Yamaguchi Prefectural University
- 4) Department of Culture and Creative Arts, Yamaguchi Prefectural University
- 5) Department of Nursing, Yamaguchi Prefectural University

## I はじめに

山口県立大学の共通教育（現在の名称としては基盤教育）として「地域共生演習」が本学の校是である「地域との共生」の具現化のため学生を地域で学ばせる科目として登場したのは、平成19（2007）年度からである。この授業は、全学の学生を対象として前期科目として開講され、山口県内の様々な地域住民の方々の協力を得て、学生が農業体験等のフィールドワークを行ってきた<sup>1)</sup>。しかし、令和3（2021）年度入学生を最後に、この科目を有するカリキュラムが閉じられることとなった。

そこで、この科目の中の1つのプログラムとして学生が地域住民と共に取り組んできた「もりさま祭り」についての記録を残しておくことは本学の歴史の一部として価値のあることと考え、2021（令和3）年度の「地域共生演習b」履修生6名及び本学大学院国際文化学研究科修士生でもある今八幡宮宮司小方礼次氏ともに本稿を執筆することとした。さらに、科目終了後の祭りの継続方法についても検討を行った。

執筆は、I、IV～VIを令和3年度地域共生演習b履修生と担当教員人見が、II、IIIを小方氏が担当した。

## II 荒高神社・荒高町内会とは

この項では、もりさま祭りが山口県立大学、野田学園高校と地域が共同して実際されていた平成29（2017）年当時を中心述べる。

### 1) 荒高町内会

荒高町内会は、山口市内でも中心商店街に隣接する市街地であり、古くから商業に携わる住人が多い自治会である。2017年10月時点の世帯数は100軒である。

自治会区域内に白石地区地域交流センターがあることや、一定の広さの境内を有する浄土宗の長寿寺があることもあり、自治会活動は周辺自治会と比べて活発であり、各家の前で植木鉢を育てる自治会花いっぱい運動や、太極拳、水墨画教室などが行われている。また長寿寺においても、不定期に自治会を中心としたジャズの演奏会やカラオケ大会などが催されるなど横の繋がりも深く、自営業者が多いことも日常から顔を合わせる機会が比較的あるため連携や交流も充実している。

### 2) 荒高神社の由来

祭神は菅原道真であり、菅公大宰府へ下向の途次

に立ち寄り休息をとった場所が旧址（現在は国道262号線道路）とされる。『防長寺社由来』<sup>2)</sup>には記載がなく、『防長風土注進案』<sup>3)</sup>には鎮座年不明とある。同書によると、社は本殿・拝殿のほかに通夜所（直会所）を具備するとある。祭日は3月朔日と8月朔日とあるが、現在3月の祭事は既になく、現在の八朔である9月朔日に例祭が行われている。

当社は今八幡宮の末社として荒高町にあったものが、明治41年3月31日、神社整理により摂社・八柱神社に合祀され現在に至る。祭神が菅公であるため天神様であるが、住民からは火難除けの神さまとして知られる。

### 3) 荒高神社例祭

当社の祭礼は、通称「もり（森）さま祭り」と称している。もり（森）さまとは、近郊には同じように称する祭りが他に一社ありその謂れも異なるが<sup>1)</sup>、当自治会の伝承では、かつて旧鎮座地は深い森であった。あるとき町に火災が生じたとき、社から荒高の神さまが馬に乗り火事を知らせた。それを聞いた住人により火はすぐに消されて大事に至らなかった。これ以後「森の神さま」、「森さま」と言われるようになったと伝えられる。これを自治会では、祭礼に際して自治会住人や学生・生徒など祭りの参加者に毎年紙芝居で紹介しているが、口伝であり文献には記されていない。

当自治会は今八幡宮の氏子中、唯一独自に神輿を所有しており、それだけ祭礼に対する自治会の熱意が分かる。神輿は平素、今八幡宮の神庫に収められており、祭礼前に自治会の婦人により清掃、飾り付けが行われる。昭和6年に発行された『防長祭祀暦』<sup>4)</sup>の9月朔日の項によると、「山口荒高森さま祭り。夜店が出て商家各々自家商品で飾り物を作る」とあり、現在と同じく夜間主体の祭りで賑やかな様子がわかる。

祭礼にあたり、毎年「もりさま祭り実行委員会」が立ち上げられる。自治会主要メンバーからなる実行委員会は任期不定期で、実行委員長を筆頭に、副委員長、町内会長、会計、監査のほか14名の理事から構成され、これに山口県立大学から2名の教員が大学担当として加わる。

当日は午後2時より荒高町内会住人の参列もと例祭が行われ、自治会所有の神輿（80kg）が今八幡宮から旧址付近の長寿寺境内をお旅所として滞在、その間同所では御飯屋を設けて神輿を奉安し、供え物をして一年ぶりの里帰りを祝う。

例祭当日、八柱神社に鎮まる祭神を神輿に遷霊し

<sup>1)</sup> 市内吉敷畑鎮座の畑河内神社には、秋の収穫後に「もりさま」と称される、竹串に付けた御幣を刈り取ったあとの田に刺し、田の神に感謝を示す風習がある。この地に藩主毛利家の一族が移り住み農民となった（子孫は毛利田と称して今も居住している）ことにより、「毛利さま」が訛って「もりさま」となったといわれている。

て旧址自治会までの御神幸が行われる。古くは自治会の男性により担がれていたものが、長らくトラックに載せて長寿寺まで運ぶだけという期間が続いていた。担いで渡御していた時期は、既にそれを知る者が居ないほど遠い昔である。

祭りが最も賑わう夜の余興は、芝居や模擬店などでそれなりに人は集まっていたが、昼間に行う神輿渡御こそ祭礼として重要な行事であるとして、僅かな距離でも担いで復興しようという気運は少なからず住人にあいだでは常に存在していた。

### Ⅲ 山口県立大学「地域共生演習」履修生の「もりさま祭り」への関わり (2007-2019)

#### 1) 学生の参加

そのようななかの2007年、自治会主要構成員である柳井義途氏が山口県立大学において売店を営む縁もあり、同大との連携を模索、これが文部科学省事業「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」の「テーマ1 地域活性化への貢献」に採択され、地域の魅力の発見と課題解決をめざす住民主体のフィールドワークに学生を送る多世代交流・地域共生授業として採り入れられた<sup>5)</sup>。地域貢献型大学を目指す同大との思いが重なり、更には高大連携協定を結ぶ野田学園高等学校生徒も合同で行い、学生・生徒が神輿担ぎを含む関連行事に参画することで、中絶していた御神幸が復活し、自治会を始め渡御道中の商店街関係者からも賑わいを期待し大いに歓迎された。このことは、衰退する祭りに大学（学生）が協力し、地域のひととともに祭りに賑わいを取り戻すと好例として、全国紙を含めた新聞やテレビなどマスコミ各社も取り上げ大きく報じられた。

開始当初は、県立大学の教員であったR.シャルコフ氏（現米国センター大学）が、かつて野田学園高等学校の教員であったことが架け橋となり、渡御における学生と生徒を取りまとめる総合的指導を9年間務め、柳井氏とともにその明るさと人柄により自治会との連携も至極円滑に進められた。特にシャルコフ氏が外国人でありながらも、熱心に伝統祭礼の復興に尽力する姿は、当初「大学から与えられた役をこなすだけ」と感じていた自治会の人々を驚かせ感動させた。氏はのちにこの祭りのことを「キリスト教を信仰する私が言うのは可笑しいかも知れませんが、夜のお宮や旧荒高神社の神様がお宮にお帰りになる際の儀式はすごく神秘的で、一緒にお参りしている他の方々とはもちろんですが、神様に側近している気がしてなりません。」<sup>6)</sup>と感動を表している。

また当自治会地域には県立大学の教員が複数居住しており、学校側の担当者ではないながらも、祭礼に訪れて学生を激励し、直会には自治会住人として

参加することも、少なからず両者を繋ぐ後押しとなった。

この祭礼に県立大学が参入したことは、それまでマンネリ化した自治会の祭りを一変させた。生徒を引率し渡御に随行していた野田学園高等学校のN教諭は、学校が参加して3年目である2010年の直会において、特別に発言を求めて皆の前で次のように語った。

「神輿とともに歩いているとき、一人の老婆が玄関先まで出てきて静かに手を合わせて涙ぐんでおられました。やがて自分の方に歩いてきてこう言われました。『（御神輿の渡御を）復活して頂いて有難うございました。』この言葉を聞いて、私も目に熱いものを感じましたが、横にいた県大の女子学生さんは感動してもらい泣きしていました。来年もまた、お年寄りの笑顔のためにこのお祭りを盛り上げていきたいと思います」<sup>6)</sup>。このように、見る側と行う側の両者がともに感動を共有する美しい光景が見られた。

学生の参加行事は夜間の催しでも企画・実行された。それまで、模擬店を除く催しは、招聘した地方劇団による人情芝居やカラオケ大会が行われる程度であったものが、学生の企画によって和太鼓、フラダンス、太極拳、手話サークル、よさこい、学生による歌と踊りのステージ（以上2016年の場合）など賑やかなものとなり、その内容は毎年変化をもたせて異なる内容であることから、訪れる人々を飽きさせない新鮮な風を吹き込んだ。

神輿渡御が始まったことにより祭りは明らかに活気づいた。それまで自治会所有の太鼓は無く、今八幡宮の太鼓を借りていたものが、2011年には自治会により新たに購入され、また地元の工務店により馬（神輿積載台）や賽銭奉納者に頒布する手作りの木札守りも新たに製作されることとなった。

#### 2) 事前準備

自治会内で開催していたものが、高校生・大学生を交えたものとなったことで事前の準備も念入りになり、これまでなかった作業も始まった。

新年度が始まると、県立大学と自治会実行委員会との企画運営会議が開催されており、どのような舞台プログラムや模擬店を行うかなどが話し合われている。これは、学生の発案によりその年ごとに異なる企画となっている。

学生と生徒が参加するうえで、彼らが祭りの由来や歴史を知る必要があった。大学関係者からの提案により、何も分からずに「ただ参加するだけ」では意味がなく、両神社（今八幡宮と荒高神社）の関係や祭りに関する淵源を知る必要があった。これには自治会も歓迎した。解説は自治会から依頼を受けた





写真1 森さま祭り お仮屋 (2017年9月 小方撮影)

今八幡宮の神職があたり、参加する学生・生徒が集まり事前合同説明会が行われた。自治会関係者も詳しい由来を知らなかった人もあり、一緒に参加し聞くことで、関わりを初めて知ったという住人も多数あった。これはその後現在でも毎年行われている。

自治会と学生の共同作業として、長寿寺において木札守りの製作がある。これは、伝統的な守り札ではなく、学生の発案で新たに導入されたものである。発案当初は直径10センチほどの乾燥させた丸木を町内の工務店に依頼して薄板に加工したものを利用していたが、その後は加工しやすいよう薄い長方形の板に変更された。今八幡宮と荒高神社の号と判が両面に押され、首から下げられるようカラフルな紐とビーズ玉が付けられる。自治会と学生はこの作業において、コミュニケーションが図られ互いに緊張が打ち解けることは、祭礼での円滑な進行に関係している。

学生と地元小学生との共同作業もある。もりさま祭りの団扇の作成である。使用済みの団扇を回収（県立大学売店に回収箱を設置し学内から不用となった団扇を集める）して、町内の子供会の児童とともに色を塗り直しオリジナルの団扇を作成、スタッフのほか自治会に配布している。しかし、町内の児童数の減少のため、2017年頃からは学生と子供会の共同作業の実施はされなくなってきた。ほかに祭りの告知看板の設置、商店街からお旅所までのしめ縄張り、福引券の作成などの共同作業があり、祭礼当日には早朝6時より約2時間掛けて、お仮屋（写真1）やステージを設ける作業を行う。

自治会婦人部では、神輿の清掃が行われる。一年間倉庫に保管されていた神輿を磨き、故障箇所の有無が確認されて祭礼当日に備えられる。

### 3) 祭礼当日

ここで、2017年9月1日、もりさま祭りのタイムスケジュールと所役を表してみる。

9月1日（木曜日）

6:00～8:00

・会場準備（お仮屋設営、舞台ステージ、テント設営、模擬店用テーブル搬入、ステージ前観客用パイプいす搬入、照明配線）

作業は、自治会関係者と県立大学の学生、教員、宮司が行う。使用する備品は長寿寺に隣接する自治会の倉庫に保管されており、ここから全ての備品を搬出する。

作業終了後、学生は境内にて朝食（サンドウィッチ、味噌汁、お茶は自治会が用意。この年は境内であったが、それまでは白石地区地域交流センターであった）、祭り衣装に更衣後、適宜自治会（実行委員）2名により、リヤカー（神輿積載用）と子どもみこし（白石地区所有）ほか渡御調度品を今八幡宮及び中市商店街のNAC（神輿パフォーマンス会場）まで搬出。

10:30 県立大学学生、今八幡宮にて神輿パフォーマンス及び太鼓打ちの練習

11:30 昼食

12:30 野田学園生徒が合流し、学生との合同練習（この間、適宜休憩を挟む）

14:00 自治会長挨拶、実行委員長行程説明  
拝殿に移動

14:15 神輿遷霊祭

14:40 集合記念撮影

14:55 御神幸（今八幡宮出発）

15:15 NACにて神輿と太鼓のパフォーマンス、のち休憩

15:25 紙芝居上演

15:35 同所出発～神輿を担ぎ商店街を渡御

15:40 みずほ銀行前にて神輿と太鼓のパフォーマンス

15:45 同所を出発して田町（荒高町内会最西端）まで渡御、のち折り返して長寿寺に向かう

16:10 長寿寺（神輿御仮屋）到着16:18 神輿と太鼓のパフォーマンス

16:35 お旅所祭

16:45 同祭了

17:00 白石地区地域交流センターにて一旦解散（野田学園生徒は帰校、学生は休憩のち夜間催事準備）

18:00 模擬店ほか催事開始

21:00 催事終了、遷幸祭ののち神輿を今八幡宮へ奉安。拝殿にて遷霊祭執行。簡素な直会のち解散

・御神幸参加者

自治会長……………露払い（清め桶）

山口県立大学学生……………神輿担ぎ、同パフォーマンス、リヤカー、賽銭籠、木札頒布

野田学園高等学校生徒……………神輿担ぎ、同パ



フォーマンス  
 白石地区児童、同保護者……子ども神輿担ぎ、  
 同随員  
 荒高町内会関係者……交通誘導、道具持  
 ち、幟ほか  
 県立大学教員、野田学園教員…随員  
 県立大学職員……写真係  
 今八幡宮宮司……御幣

今八幡宮から中市商店街入り口まではリヤカーで渡御し、ここで毎年学生が考え幾度も練習を重ねた「神輿パフォーマンス」（写真2）が披露される。掛け声を決めて、独自に考えたパフォーマンスにより神輿を前後左右に傾斜させるほか、高く持ち上げ回転するなどして練習の成果を発揮する。また太鼓を打ち鳴らす演奏もあり、買い物客は足を止めて観賞している。その後は町内関係者が手作りした荒高神社及びもりさま祭りの由来を解説する紙芝居も上演される。

#### 4) 模擬店と催し

2017年のもりさま祭りでは、模擬店やステージも行われた。模擬店では、学生によるアイスキャン



写真2 県大生による神輿パフォーマンス  
 (2017年9月 写真は荒高町内会提供)



写真3 森さま祭り 地元愛好者によるアメリカンフォーク (2017年9月、写真は荒高町内会提供)

ディ、からあげ、輪投げ、かき氷などがあり、自治会によるジャグリング、ヨーヨーすくい、福引きと飲み物の販売があり、荒高倶楽部によるバザーなどがあった。一方、ステージの催しでは、宇部太鼓以外、県立大学の学生による手話やよさこいや地区住民による創作太極カンフー扇（白石地区）、フラダンス及びアメリカンフォーク（写真3）などがあった。なお、県立大では、もりさま祭り参加者だけによるステージも同時に行われた。

#### 5) 直会<sup>なほらい</sup>

祭礼翌日、午後7時より長寿寺の広間において、地元では「お通夜」と称する直会が行われる（写真4）。参加者は自治会（実行委員）や県立大学の参加学生、同教職員、野田学園教員、今八幡宮宮司の総勢30～40人という大きなものである。ここでは自治会の婦人有志が作ったおにぎりのほか、地元の惣菜店から取り寄せたオードブルが並ぶ。ビールなどのアルコールもあるが、参加学生は殆ど未成年である1～2年生であるため、学生は原則飲酒禁止である。

直会といえども単なる飲食の場ではなく、半分は反省会であり、残りの半分が慰労会といったところである。内容は、まず自治会長の挨拶から始まり、実行委員長による御礼と総括（反省点や改善点）が述べられる。続いて県立大学教員の総括（学生が関わる全般について）、があり、乾杯となり直会が開始される。この場において、自治会の住民も普段顔を会わせる機会が少ないが、飲食をともにすることはこの時だけである。祭礼の反省点のみならず、自治会活動全般についての話題がでるのも、アルコールを前にしてということが大きく関わっている。途中、恒例となった自治会の女性2名による紙芝居が披露される。これは、絵心のある二人（子ども会関係者でもあり、子ども神輿に随員している）が毎年、神話を取り上げて紙芝居を作成、主に学生に対して披露するものであり、既に10作近い作品がある。第一作は「もりさま祭り」であり、その由来を平易に解説したものである。



写真4 直会風景(2016年9月、写真は荒高町内会提供)

続く会場の目玉は「お賽銭金額当てクイズ」である。これも古くからの恒例であり、かつて紙芝居上演がなく学生が参加する以前は唯一の余興であった。内容は明快で、昨日（祭礼時）におけるお賽銭の総額を当てるというもので、御神幸での賽銭籠、お仮屋前の賽銭箱を合算した全てである。紙に記し、最も近い人（実際の金額より超えると失格）から順に景品が複数用意されている。当初は賽銭額を当てる（学生に対して公表する）ことに対して自治会では異論もあったが、全ての参加者に金額を発表することで皆に祭りの成果を報告する意味があるとして納得された。

会場の賑わう場は、春から猛暑を経て当日までの間、苦労を共にしてきた自治会の人々と学生の良い慰労と交流の場となっており、自治会のなかには勤務都合により準備や当日に参加できなくともこの直会だけは参加するという人もいるくらいである。これは学生が参加することによって、廃れ始めた祭りが再び息を吹き返し、今では「自治会の祭り」の域を超えて「山口の祭り」と認識されていることへの感謝でもある。

#### 6) もりさま祭りの意義

当祭礼においては、例祭日が9月朔日と決まっております、休日ではないために、2006年以前は勤務による人手不足により自治会のみでは既に神輿を担ぐことが出来なくなっていた。神輿はトラックでの往復でありそのため御神幸は行われなかった。夜間の催しも、町内会有志による模擬店のほかは町内会が招聘した大衆演劇一座による昭和の風情を残す人情芝居の上演のみであったため次第に真新しさがなくなり近隣より見物に立ち寄る人々の関心が薄れつつあった。2007年より大学と連携することで神輿を担ぐことができ、毎年異なった催しを行えるようになったことは、祭りが賑わいを取り戻したうえ若返ったことにより、自治会の人々もそれまで以上に精力的に関わる呼び水となった。運営に関する収支も、商店街を渡渉することで賽銭収入ができたほか、模擬店数が増え、多彩なステージでの催しを行うことで観客が増加したことで自治会の収入も増えた。これらによって、年間を通じた自治会活動も積極的に開催できるようになり、その結果、自治会の人々が会する機会も増えて纏まり、より親睦が深まったことは現代社会が抱える希薄な人間関係とは無縁の、祭りがもたらした大きな成果である。自治会においては、年間様々な催し・行事があるなか、当祭礼が最大の行事であり、氏神社・長寿寺・自治会が一体となって行う住人の精神的拠り所であることは、祭りに関わることで近年周辺に林立するマンション世帯など、地区行事への参加に消極的な新規居住者

に対して手本となるべき円滑な近所づきあいが感じられるとともに、これほど大規模な祭りを、一自治会で開催しているという地区、更には市内にさえ誇る自負が感じられる。

他方、懸念事項がないわけではない。まず、県立大学の参加が永続する保証はない。大学生の参加により活気を取り戻した祭りであるため、今後大学が不参加を決めた場合、また以前の「疲弊した祭り」に逆戻りしてしまう恐れがある。そのほかにも、現在、祭りの運営に中心的役割を担う実行委員の大半が70歳を超えた高齢者ということである。運営の世代交代が停滞しているのは、9月1日という祭礼日が固定されているため、現役世代は仕事の勤務によって参加できないからである。由緒を守り祭礼日を現状維持するか、世代交代に向けて日曜日などに変更するかということも、今後の課題となろう。

#### IV コロナ禍（2020-2021）における「もりさま祭り」

2020年には、新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大が起り、もりさま祭りも多大なる影響を受けた。2020年及び2021年は新型コロナウイルス感染防止の観点から、前項に述べたような学生たちが関与し、大学生・高校生と町内有志がともに運営する形態での祭りの実施は不可能となった。そこで、荒高町内有志のみによる実施に戻され、町内有志がトラックで神輿を運ぶ従前の形での開催となった。地域共生演習の授業も、2020年度はもりさま祭りをはじめとするフィールドワークを含む内容のほとんどを中止し、オンラインでの授業中心となった。翌2021年度も、コロナウイルス感染防止の観点から、従来のような祭りを行うことはできず、その記録を残す目的で地域共生演習bクラスの受講生6名と教員が町内実行委員会の主催するもりさま祭りの取材を行う形とした。以下に2021年のもりさま祭りの準備から当日の流れ、片付けまでのスケジュールをまとめた。

2021年9月1日当日の神事は町内会や地区の体育協会、消防団から集まった11名と地域共生演習履修生及び教員計7名、合計18名のみの小規模な神事となった。

#### 2021年の祭りスケジュール

8月20日（金曜日）

19：30～ 実行委員会及び町内会関係者による打ち合わせ会  
御幣作り400枚

8月28日（土曜日）

7：00～ しめ縄張り（しめ縄、御幣、さしわらの準備）



しめ縄張り終了後、今八幡宮の神輿の拭き清め

9月1日(水曜日)

6:00~8:00 会場準備(御旅所、テント、照明器具)

13:00 町内会有志が長寿寺前に集合し、今八幡宮へ移動

13:30 神輿遷霊祭(今八幡宮)(写真5)

13:45 集合記念撮影(今八幡宮)(写真6)

13:50 御神輿を軽トラックにて御旅所へ移動(写真7)

14:00 御旅所(長寿寺)にて神事(写真8)

14:00~20:00 町内有志の参拝(写真9)

20:00 還幸祭(写真10)、そののち御神輿を今八幡宮へ泰安殿にて遷霊祭執行(写真11)、御神輿の安置(写真12)

9月2日(木曜日)

6:00~ 後片付け



写真5 今八幡宮での神輿遷霊祭



写真6 今八幡宮での集合写真(写真は荒高町内会提供)



写真7 神輿を軽トラックで運ぶ



写真8 御旅所(長寿寺)での神事



写真9 参拝者を待つ御旅所



写真10 御旅所(長寿寺)での還幸祭





写真11 今八幡宮拝殿にて遷霊祭



写真12 御神輿を収納庫に納める

## V 地域住民の「もりさま祭り」についての思い ～学生のインタビューから～

祭り当日の御旅所での神事後、学生が地域の方々に以下の項目でインタビューを行った（写真13）。インタビュー内容は以下の通りである。

- ① 年齢
- ② 自身の子どもの頃のもりさま祭りについて（規模、神輿の形式、夜店など）
- ③ いつ頃からどのような経緯で主催に回ったか
- ④ いつ頃から活気が無くなってしまったと感じたか
- ⑤ 県大が関わってから木札作りが導入されたが、それ以前にもりさま祭り特有のしきたりはあったか
- ⑥ 今、自治体で祭りを実施、もしくは継続するためにやっていることはなにか

インタビュー結果を以下に示す。

・実行委員長T氏

- ① 65歳
- ② 小学校入学前（約60年前）から参加している。



写真13 インタビューの様子

当時は荒高町内の子どもも多く、男神輿だけでなく、子ども神輿も担がれていた。今八幡宮から長寿寺への神輿を運ぶ経路は現在の経路と変わらない。昔の夜店はヨーヨー釣り、金魚すくいなど。現在は焼きトウモロコシ、焼き鳥、輪投げなど大きな変化はしていない。

注）この夜店は業者ではなく、町内会有志により運営されている。

- ③ 約20年前に主催側へ、荒高町内会からもりさま祭りの実行委員を有志で募り参加。
- ④ 約20年前から参加人数が減り、盛り上がりが無くなった。高齢者が増え、運営が厳しくなり、荒高町内だけでなく、白石町内会（白石地区は荒高を含む白石小学校の校区であり、全体を白石町内会と称する）、白石地区の消防団、体育協会が協力するようになった。
- ⑤ 特になし。
- ⑥ しめ縄張り、県大への協力の呼びかけ

・町内会長O氏

- ① 69歳
- ② 元々は荒高町内の住民ではないので、子どもの頃に祭りに参加はしていなかった。13年前に荒高地区のマンションに引っ越し、町内会長となり、お祭りに参加するようになった。
- ③ 13年前に町内会長となり、もりさま祭りの主催者となった（すでに県大が祭りに参加してからの参加）。
- ④ （祭りに活気のなかった頃を知らないため）不明
- ⑤ 不明
- ⑥ 地域の人に声かけをする（町内会班長、消防団、体育協会）。白石地区の方と協力してお祭りを行っている。自治会サポーターを作り、地域外の人（白石地区の消防団、体育協会）でも、理念が合えばお祭り等に参加できるようにした（3年

前から)。

- ・ 祭り当日参加されていた荒高町内の婦人 3名 (うち2名はYY氏、O氏の夫人)
- ① 70代2名 (y氏、T氏)、64歳 (o氏)
- ② 不明
- ③ y氏：20年、T氏：7～8年、o氏：10年くらい前から関わっている。
- ④ 子どもが減り、子ども神輿がなくなった頃から盛り上がりが無くなった。
- ⑤ 何もなかったが、県大生が関わりだしてから木札を作るようになった。
- ⑥ 学生が13年間主に行ってきた木札づくり。



写真14 木札 (右側2つは考案された当時のもの、配布時は右下のように包装して配布、左側は2019年に作成したもの)

- ・ 白石地区体育協会会長Y氏
  - ① 62歳
  - ② 不明
  - ③ 3年前から高齢化によりお祭りの運営が厳しくなり依頼がきた。「地域の体育だけでなく、文化や教育など伝統的なものに参加して手助けし、継続させる。これにより、地域に貢献していく。」という理念に賛同して参加。
  - ④ 不明
  - ⑤ 不明
  - ⑥ 学生が様々なアイデアを出してくれたことに感謝している。
- ・ 元町内会長YY氏 (祭り当日以前に別途インタビューを実施したため質問が異なる)
  - ① 県大生がもりさま祭りに加わってよかったこと13年間、県立大学や野田学園の学生が立案からもりさま祭りに加わってくれてから町内の活動が

スムーズになり、本当に助かった。立案だけではなく、体力仕事、夜店などにも参加してくれた。高齢化が進んでいる町内で、祭りの主催側も人手不足や体力的に厳しい部分ができ始め、祭りの開催に伴って難しい部分も見られた。しかし、学生が参加してくれるようになり、声をあげて元気に活動している姿、祭りが終わった後の「楽しかった」や「ありがとう」の声を多くもらいとても嬉しい思いであった。また、学生が参加する前は夜のステージ発表で大衆演劇を25万円ほどのお金をかけて呼び盛り上げていたが、学生が加わってからは県立大学のよさこいサークルなどの発表で、祭りに来られたお年寄りの人だけでなく、お子さんも楽しめるステージとなった。

- ② YY氏が子どもの頃のもりさま祭りについて  
子どもの頃から行われており、その当時は子どもも多くいた。その頃の祭りや町の様子は今でも心に残っている。
- ③ 現状とそれに対する思い  
都会に行って地元(荒高)に帰ってこない若者が増加し、荒高町内の子どもが減った。若者が減ったことにより御神輿が担げなくなり、リヤカーだけで運ぶこととなったのは寂しい思いだった。県大生が参加し、子ども神輿の再興が立案され、白石小学校にも声をかけ、60人程度で子ども神輿を担ぐようになった。これからも学生、生徒に参加して欲しいという思いはあるが、学校の方針も考慮しなければならない。
- ④ これからの展望について  
荒高町内だけでは若い世代も少なく、継続していくことが難しいので、「白石地区」という荒高町内を含む広域での継続を考えていきたい。核としては、白石地域交流センター、白石まちづくり協議会を中心とし、白石フェスティバル(注：毎年11月に白石地域交流センターにおいて様々な団体が関わって開催される白石地区のイベント。太極拳、民謡、絵手紙、バザー等、様々な団体が参画して開催されている。荒高町内は、行政的な地区である白石地区に含まれる。)のような様々な人が関わるものとした。例として、体育協会、消防団は夜店の出店を、白石地域交流センターの講座等の参加者(太極拳、フラダンスなど)には発表の機会として祭りでのステージをして欲しい。

## VI 祭りの継続のために ～学生からの提案～

前述のYY氏の語りにあったように、コロナ禍により県立大学からの学生の参画がなくなってきた現在のもりさま祭りは町内有志だけでなく、荒高地区を含む広い町内区域である白石地区の体育協会や消防団の協力を得て実施されている。祭りの実施に



は、町内の倉庫に保管されている古くからの建材による御旅所の組み立てなど力仕事が必要であり、体育協会や消防団の参加は非常に強力なサポートとなる。

さらに新しい視点を踏まえて祭りの継続ができないかについて、2021年度の地域共生演習履修生が方策を検討した。祭りの継続のためには、主催者側の人材及び資金の継続的な確保が重要であり、提案はその観点を中心に検討を行ったものである。これらの提案はこれまでの伝統を考慮したものばかりではないため、実際に祭りを司る荒高町内に受け入れられるとは限らず、またプランとしては、すぐに実行可能なレベルのものから様々な体制作りが必要となる難易度の高いものまでであるが、あくまで可能性として提案する。

#### 1. 開催日の変更

もりさま祭りは毎年9月1日に行われているため、開催曜日は平日の場合が多くなる。平日の場合には、仕事などの都合で参加ができない人が町内でも多数いると思われる。そこで、9月1日に一番近い休日へ開催日を移動させることで主催者側の人数を集めることが可能になるのではないかと。さらに、祭りに参拝客として参加する人数も増え、祭りの活性化につながる事が考えられる。

#### 2. 大学でボランティアの募集

県立大学をはじめとする近隣大学でボランティアを募ることで人員を確保する。昼の神輿を担ぐ担ぎ手、夜店の運営のみ等、内容別のボランティア募集をすることで学生にとってもボランティアがしやすくなると思われる。一度参加した人が次も参加したくなるようリピーター化の仕組み作りも必要である。毎年7月に大規模に開催される山口祇園祭の裸坊神輿において、若者の少ない地区では大学生を対象に有償ボランティア募集がなされていることもあり、身体的な負担の大きい神輿担ぎなどの役割の場合にはボランティア自体を有償とすることを視野に入れてもよいかもしれない。

#### 3. 地域活性化を目的とするNPO法人の立ち上げ

全国には、NPO法人が祭りを支援しているケースもある。たとえば、特定非営利活動法人国際ボランティア学生協会では、地域活性化の取組として、新潟県や三重県の市町と「地域連携協定」を締結し、祭り等の運営補助を行っている<sup>7)</sup>。

NPO法人を立ち上げることで、広く参加者を集めることも可能となるだけでなく、クラウドファンディングなど新たな方法での広報や資金調達を行うことができ、全国から人員と支援者（資金）を募る

ことも可能となる。また、NPO法人化することで様々な文化事業に対する補助金の申請にもつながることが期待できる。NPO法人を立ち上げることは、様々な立場のアドバイザーを得る機会となるとともに、若い世代に祭りの経験を伝えていくことにも繋がるだろう。

しかし、NPOの立ち上げには、その核となる人材が必要である。かつて、荒高町内には、Ⅲ項で紹介した元本学教員R.シャルコフ氏が核となり、「NPO法人 まちづくり荒高」を作り、「荒高ふれあいの集い」や「ふれあい・花・コンテスト」を開催していた（残念ながら、このNPO法人は既に存在していない）。町内にとどまらない、幅広い人材の確保をどのように行っていくかが課題である。

#### 4. 高大接続事業としての可能性

現在、多くの高校では、2015（平成26）年に文部科学省が示した高大接続改革実行プランに従い、課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学びの推進を進めている<sup>8)</sup>。

このような動きの中、大学生・社会人など多様な世代との協働体験ができる地域活動への参加機会の提供は高校側にとっても貴重な機会となると考えられる。これまでは本学の連携協定校である野田学園高等学校と共に、もりさま祭りを実施してきたが、場合によっては連携する対象を近隣の他の高校にも広げることも視野に入れてもよいかもしれない。

さらに理想的には、このたびはカリキュラム改変により「地域共生演習」を閉講するものの、本学においてもこの取組を何らかの授業科目に位置づけ、協定を結んだ高校の生徒が所定の時間、大学の授業に参加し大学生とともに学び・活動をすることで本学に入学した場合に単位が認められる制度を設計する、あるいは、高校が独自に設ける「学校設定科目」に位置づけることで、高校科目として単位認定を行うことも可能性として考えられる。

このような仕組みがあれば高校からの参加者が増加するに留まらず、大学側も入学希望者を増やすことができる可能性があり、地域、高校、大学の三者にとってのメリットがある。

#### 5. 祭りの規模を可変とするためのマニュアル作成

祭りに参加できる人数が毎年十分に確保できない場合の対応案として、祭り自体の規模を固定化せず、参加可能人数に合わせて運営方法を変更するための方策である。参加可能人数に対応して祭りの規模を変更するために、規模別マニュアルを3タイプ程度作成する。例えば、タイプ1を大学生・高校生・地域がコロナ禍以前に行ってきたような多数の人の関



わるタイプ、タイプ3を2021年度に実施したような地域有志で行うタイプ、その中間型をタイプ2とする。タイプ2については、これまでに実施した経験が無いため、どのような関係者が関わるかにより、いくつかのサブタイプを作成する必要があるかもしれない。マニュアルにより、はじめて関わる人でも祭りの全体像の把握が可能になる。また、打ち合わせの時間などの削減につながり、仕事をしながら祭りの運営に携わることが障害となっている場合にも最低限の時間での実施となり、円滑に進められることが期待できる。さらに、作業内容が明確になり最低限の人数によって開催ができる効果があるかもしれない。

## 6. 地域の子供が祭りに親しめる工夫

現在、各地域の小学校においても「地域学校協働活動」（地域と学校が連携・協働して、地域の高齢者、成人、学生、保護者、PTA、NPO、民間企業、団体・機関等、幅広い地域住民等の参画により、地域全体で未来を担う子供たちの成長を支え、地域を創生する活動）<sup>9)</sup>やコミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）<sup>10)</sup>の推進に向けた取組が進められている。

かつては、このもりさま祭りにおいても、地域の市立小学校である白石小学校と連携し、小学校での参加呼びかけにより、荒高地区外から参加する子供の数が大幅に増えた時期もあった。しかし、現在では授業時間数の確保等、小学校側の事情もあり、荒高地区外の小学生の参加はほぼ不可能となっている。しかしながら荒高町内に居住する子どもの数は少なく、子供会としての活動も難しい状況である。さらに、白石地区には市立白石小学校のほか山口大学教育学部附属山口小学校もあることから、同じ地区内に居住していても通う小学校によって9月1日のスケジュールが異なることも小学生の参加が難しくなる要因となっている。

そこで、仕組み作りとして、荒高町内にかかわらず周辺地域の子どもたちが参加できる新しい形を考えてはどうか。例として、小学校区内にある公立や民間の学童保育所や、子供を対象として活動しているNPO等と連携をして、もりさま祭りを地域と触れ合うイベントとして位置づけ参加を募ることが考えられる。その地域に居住しているという従来型から、地域で活動を行う子供を対象とする新しい形態で、子供たちが参加できるようにする仕組みを作る。

子供の祭りへの参加に関して大きな障壁となるのは、親が就労していたり、幼児を抱えていたりなどで日中に子供の祭り参加の世話ができないことであるが、学童保育所などのスタッフや学生ボランティアがその役割を担うことで、その障壁を取り除くこ

とができると考える。子供が祭りに親しむことで、夕方からの夜店においては、働いている親も帰宅後に子供と共に祭りに参加するなど、これまで祭りに親しんで来なかった層にも波及効果が期待でき、祭りを支援するボランティアの増加に繋がる可能性もある。

## VII おわりに

山口県立大学は4つの校是の1つとして「地域社会との共生」を掲げているが、県内外のさまざまな地域から進学してきた大学生が、地縁の無い大学周辺地域の活動に自らの自由意志で参画することは、それほど容易なことではない。「地域共生演習」は科目履修という強制的な形態ではあるものの、その機会となり、また科目であるがゆえに教員が地域との関わり方を学生に指導することも可能であった。

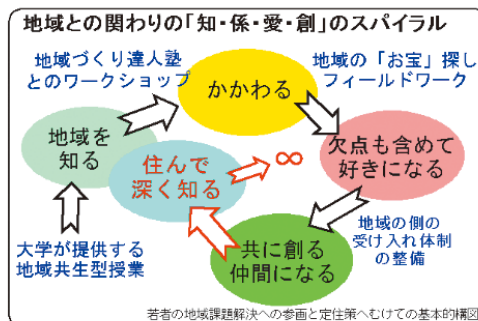
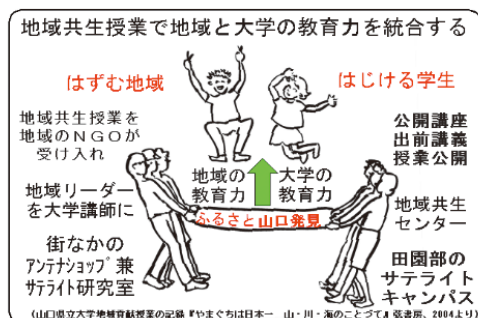
この授業が始まった2007（平成19）年に、文部科学省大学教育改革支援プログラム「現代GP 地域活性化への貢献（地元型）」に「やまぐち多世代交流・地域共生授業の展開」が採択された（スキーム1）<sup>11,14)</sup>。この補助金を得て、普通では為し得ない多様かつ充実した取組が可能となったことも、この授業が15年にわたって継続した一因である。この補助事業内で作成したDVD「地域が学校・地元が先生 ムラの笑い・マチの笑顔」<sup>12)</sup>においても、もりさま祭りの様子が記録されている。補助事業の主担当者で、この授業を設計した安溪遊地氏（本学名誉教授）の理念「地域が教室、地元が先生」<sup>13)</sup>はまさに、この地域共生演習によって具現化し、多くの学生達はもちろん共に科目を担当した教員に「地域と共に生きる」とはどのようなことなのか、身をもって学ぶ機会を与えた。

もりさま祭りは荒高地区の伝統行事であるにもかかわらず、大学生の様々な、場合によっては突拍子もない発案を快く受け入れてくださった柳井義彦氏をはじめとする荒高地区の皆様は厚く御礼を申し上げたい。さらに、地域共生演習という形態は終了するものの、地元の大学として、何らかの形で今後もこの祭りの存続に向けて関わりを持ち続け、地域との共生とは何かを学生たちに教授していくことができるよう努力したい。

**取組名称：やまぐち多世代交流・地域共生授業の展開**  
**大学名：山口県立大学**

○取組概要 副題「山口市の都市部と田園部におけるワークショップ型授業による団塊世代と若者の定住促進」が示すように「地域が教科書・地元が先生」ととらえ地域共生授業で学生自身が地域の希望の星となる。

● **取組の内容・ポイント**



● **取組の成果**

**山口市地域再生計画数値目標を超過達成**



- ・受講生約600名。卒業後も地域に関わり続ける者24名(図の★印)。住民主体の地域づくり塾15ヵ所、塾生756名(リーダー85名)。
- ・地域作りハンドブック3冊。映画2本。地域再生フォーラム3回。ブログによる発信159回。大学予算で2年間のGP承継が決定。

● **学内外からの評価**

みこしに向い深々と頭を下げるおじいさん、涙を浮かべて手を合わせるおばあさん……昨年履修した村上陽子さん(19)は語る「自分たちが祭りを楽しみ、その姿を見た地域の人々が元気になればそれが地域貢献につながる。授業は1度きりだけど、祭りを続けていくため来年も参加したい」(『読売新聞』全国版「大学を歩く」安井隆之記者 2009年9月11日)

スキーム1 山口県立大学 文部科学省等採択プログラム 現代GP(地域)概要<sup>14)</sup>

**参考文献**

- 1) 安溪遊地 地域が教科書、地元が先生「地域共生演習」の開発と定着－地域の教育力を生かしたアクティブラーニングの実践、山口県立大学学術情報 第10号、第2部、平成28年度桜園教育賞、1-2、2017。  
<https://www.yamaguchipu.ac.jp/archives/2017/02/part2/01.Education%20Award.pdf> (令和4年1月10日閲覧)
- 2) 山口県文書館編『防長寺社由来』第三巻 1982。
- 3) 山口県文書館編『防長風土注進案』第十三巻山口宰判下 1961。
- 4) 防長史談会編『防長史學』所収「防長祭祀暦」第二巻第一号 1931。
- 5) 山口県立大学創立75周年記念誌発行準備委員会編「山口県立大学75年記念誌」、p.67、2016。
- 6) 今八幡宮機関紙 鴻城鎮護、p.7、2010。
- 7) 特定非営利活動法人 国際ボランティア学生協会  
[https://www.ivusa.com/?page\\_id=7566](https://www.ivusa.com/?page_id=7566) (令和4年1月10日閲覧)

- 8) 文部科学省 高大接続改革プラン  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/hukyo/chukyol2/sonota/\\_icsFiles/afieldfile/2015/01/23/1354545.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/hukyo/chukyol2/sonota/_icsFiles/afieldfile/2015/01/23/1354545.pdf) (令和4年1月10日閲覧)
- 9) 文部科学省 学校と地域でつくる学びの未来 地域学校協働活動  
<https://manabi-mirai.mext.go.jp/torikumi/chiiki-gakko/kyodo.html> (令和4年1月10日閲覧)
- 10) 文部科学省 学校と地域でつくる学びの未来 コミュニティ・スクール(学校運営協議会制度)  
<https://manabi-mirai.mext.go.jp/torikumi/chiiki-gakko/cs.html> (令和4年1月10日閲覧)
- 11) 山口県立大学 文部科学省等採択プログラムについて 現代GP(地域)  
<https://www.yamaguchi-pu.ac.jp/au/ap/shitukoujou/> (令和4年1月10日閲覧)
- 12) 公立大学法人山口県立大学地域共生演習ドキュメンタリー-2009年度作品、  
 企画：安溪遊地、監督：西山正啓、カラー/107分、2010。
- 13) 安溪遊地 地域が教室・地元が先生・地球がキャンパス－大学の一般教育で「地域と環境」

を伝える試みの20年、山口県立大学学術情報  
第7号（共通教育機構紀要 通巻第5号）、17-31、  
2014.

- 14) 山口県立大学文部科学省等採択プログラムにつ  
いて 現代GP（地域）概要スキーム  
[https://www.yamaguchi-pu.ac.jp/  
contents/000010419.pdf](https://www.yamaguchi-pu.ac.jp/contents/000010419.pdf)（令和4年1月10日閲覧）

#### 謝辞

本稿を作成するにあたって、ご協力いただきました  
本学売店 柳井義途氏はじめ荒高町内会もりさま  
祭り実行委員会の皆様、関係の皆様に厚く御礼を申  
し上げます。